ヴィンチェンツォ・スカモッツィの建築理論における “peritia dell’ arte” について

ON “PERITIA DELL’ ARTE” IN VINCENZO SCAMOZZI’S ARCHITECTURAL THEORY

下川 勇*
Isamu SHIMOKAWA

This paper aims to clarify the meaning of the *peritia dell’arte* in Vincenzo Scamozzi’s architectural theory. Scamozzi attached the great importance to four words in his theory. They were *scienza*, *invenzione*, *disegno*, and *peritia dell’arte*, and were related with the various architectural methods that characterize his architectural theory.

In “*L’idea della architettura universale*” the *peritia dell’arte* was contrasted to *scienza*, because the former is experience and the latter is intellect. The relationship of *peritia dell’arte* and *scienza* was important to establish the idea that the architecture is *scienza*, in Scamozzi’s architectural theory.

Keywords : Vincenzo Scamozzi, *peritia dell’arte*, *scienza*, *artisan*, *architect*
ヴィンチェンツォ・スカモッツィ, 技の熟練, 学, 職人, 建築家

1. はじめに

前々稿および前稿¹⁾において筆者は、スカモッツィの建築理論を構成する主要概念として、*scienza* (学), *invenzione* (創造), *disegno* (素描) を考察してきたが、本稿では、同じくその主要概念にあたる *peritia dell’arte* の性格を明らかにしていく。考察にあたって、上記の各概念と *peritia dell’arte* との関係を確認しながら、考察内容を整理していきたい。

スカモッツィは、建築家は第一に *scienza* を修得しなければならないとして、その *scienza* に *arti liberali* と総称される七学科を設定していた。実際の生産をつかさどる職人とは異なり、建築家は *arti liberali* を習得しなければならないことを主張していた²⁾。そして *scienza* を基本として、建築家は奇想に陥らないように自らを正しながら *invenzione* を実施し、その成果を *disegno* に導かなければならないとしていた³⁾。しかしながら、建築家が直接関与できるのはここまでであり、この後は、実際に建物を建設する職人の *peritia dell’arte* に、以上の成果を委ねなければならないと、スカモッツィは判断している。スカモッツィ曰く、「建築は二つの観点において考えることができる。すなわち、卓越さに見られる *scienza* の純粹さ、洗練さに見られる作品の完成度である。かくして (賢人が言われたように) *scienza* 全て、そして *arti liberali* 全てが、理論と実践を通じて関わっている。哲学者は、量体を、原因を通じて、抽象的に、

それらに関連する事柄がなくとも自然の中で思考する。つまり実践的自然哲学者は、秩序づけられたそれらを、その部分や手足をもった有機的なものとして、さらには治癒可能なものとして、非学的に考察するのである。一方、建築家は、自らの理念と知性において思索し、すべての *forma*、あらゆる建物の部分、そして、それらの物質的かつ実質的な原因、そしてその結果 (主に意図するところ) について論じる。したがって建築家は純然たる学者である。しかし、敷地、材料、構造そして工匠に関連する観点から見れば、人為的で居住に適した肢体 (造られた目的はまさにこれである) として考えることができるそれら建物は、感覚に大きく依存しているのであり、したがって、その判断は *peritia dell’arte* によらなければならない、*scienza* の知性 (*intelletto*) や純真さ (*purezza*) には、プラトンが言うように、関係しないのである」⁴⁾。

さて、本稿では *scienza* と *invenzione* に導かれた *disegno* に続く建築的行程の *peritia dell’arte* を考察の対象としていく。上の引用文からわかるように、全建築的行程は、*scienza* の領域と *peritia dell’arte* の領域とに二分されると考えられる。すなわち、*scienza* ならびに *peritia dell’arte* は、いずれも固有の領域を保有しており、お互いが深い関係を持っていなくとも、それ自体として成立している原理であると考えられる。しかしながら、スカモッツィが *peritia dell’arte* を論じるとき、同じ文章にも見られるように、常に *scienza*

* 福井工業大学建設工学科 講師・博士(工学)

Lecturer, Dept. of Architecture and Civil Eng., Fukui Institute of Technology, Dr. Eng.

との対立的な関係が意識されている。したがって本考察においては、*scienza* との関係を配慮しながら、*peritia dell'arte* の内容を解明していくことになる。

スカモッツィは、*peritia dell'arte* と *scienza* の関係に依拠しながら、建築家と職人の関係を論じている。この論は、建築家と職人の職域および職能を明確に規定するものであり、*peritia dell'arte* を明らかにする上で有益な議論であると考えられる。したがって、*peritia dell'arte* 自体の考察にあわせて、職人と建築家の関係に関する問題を考察し、*peritia dell'arte* の性格を明確にしていきたい。

またスカモッツィは、上記の関係を諸芸術の優劣規定にまで発展させ、独自の諸芸術比較論を構築している。周知のように、イタリア・ルネサンスにおける諸芸術比較論 (*paragone*) は、自らの芸術の社会的地位を獲得するために、自らの芸術の優越を規定しようとするものであった。この比較論の主要な論点は、如何なる芸術が *scienza* であり *arte* であるか、このことを問題にすることであった。スカモッツィが『普遍的建築のアイデア』(1615)を執筆中の頃は、既にヴァザーリによって諸芸術に平等な地位が確保され、諸芸術間の統合が目論まれていた時期にあたり、この時期にあつてスカモッツィが諸芸術間の優劣を再び規定しようとした試みは特異であると思われるが、このようなイタリア・ルネサンスの芸術論的思潮を示すスカモッツィの比較論を考察することによって、議論の中心にある *peritia dell'arte* に関するスカモッツィの主張を吟味し、*peritia dell'arte* を解明するための材料としたい。

尚、*peritia dell'arte* と *scienza* の関係性、換言すれば経験と知の関係性については、スカモッツィの建築理論全体を通じて極めて重要な問題として論じられている。このことから *scienza*, *invenzione*, *disegno* という知に属する概念を考察した前々稿ならびに前稿においても、この関係性については触れられている⁹⁾。*peritia dell'arte* は経験という固有の建築的領域を有しているが、スカモッツィが *scienza* との関係においてそれを基礎づけている限り、*peritia dell'arte* は、*scienza* および *invenzione* と *disegno* にも自ずと関連してくることになる。したがって本稿は、前々稿ならびに前稿の考察をふり返りながら進められることになることを、あらかじめ断っておきたい。

2. *peritia dell'arte* の意味

建築家は *disegno* によって図面を制作するが、その図面をもとに材料を用いて建物を建設していくのは職人である。この職人の領域を、スカモッツィは *peritia dell'arte* と呼んでいる。建築家と職人の役割は、*disegno* と *peritia dell'arte* との間で分離されており、まさしくスカモッツィの建築理論における理論と実践あるいは思索と制作との境界線がここにある。*disegno* はあくまで実践・制作の領域にあるが、しかしながら *scienza* を源とする言わば理論的实践である¹⁰⁾。一方 *peritia dell'arte* は、経験を源泉とする実践そのものである。スカモッツィ曰く、「経験から実践 (*pratica*) は生まれ、実践から *peritia* は生まれ、その後 *peritia* から *arte* は生まれる」¹¹⁾。このように、*peritia* (熟練) は、*scienza* にではなく、経験および実践に属する職人の技の精度を意味する。そして *peritia dell'arte* は、経験および実践から生み出された *peritia* が *arte* に発展していく領域を示す、いわば職人の技術全体を示す言葉である。

前々稿において、*scienza* としての *arti liberali* と *scienza* ではない *arte* について論じたが¹²⁾、このギリシャ語の *technē* に相当する *arte* (前々稿においてはこの *arte* を *arte (technē)* と表記した) は、その内に既に *peritia* を内包しており、この意味において *arte* と *peritia dell'arte* は、同様の意味に解される。

3. *peritia dell'arte* と *forma artificiale* の関係

建物を創作する過程には、*scienza* に依拠する建築家の領域と、*scienza* に依拠しない職人の領域としての *peritia dell'arte* とが設定されている。このことは、建築家の思索活動の優位を示す一方、建築家の知性のみでは建物を完成に導くことが不可能であることを明らかにしている。

前稿で考察されたように、建築家の形態操作と職人の形態操作とは扱われる *forma* が異なっていた。すなわちスカモッツィは *forma* を、数的な *forma* と感覚的な *forma* とに二分別していた。数的な *forma* には *forma naturale* (自然の形態) と *forma mathematica* (数学的形態) があり、これは *scienza* に基づく理論的なものである。感覚的な *forma* には *forma artificiale* (人為的形態) があり、これは経験に属するものである¹³⁾。

このように、*forma artificiale* は数的な *forma* と対置されるものである。このことは、*forma artificiale* が *peritia dell'arte* に関連するものであることを意味する。*forma artificiale* と *peritia dell'arte* のいずれも、*scienza* に属さない経験的な職人の領域に属するという共通点を持っているのである。

スカモッツィは、「*forma artificiale* は、我々によれば三つの様態にある。つまり、職人の能力に、材料の表面に(物体の内部には如何なる *forma* も授かることはないから)、三つ目は行為そのものにあり、これらは感覚で捉えられるものである」¹⁴⁾と述べることによって、*forma artificiale* の所在を明らかにしている。そして、「したがって、*forma naturale* は、*forma mathematica*、そして建築家のそれ[*forma*]として我々の知性によつては、このように十分には理解されえないのである。同様に、前述の形態[*forma mathematica* と建築家の *forma*]として、感覚によつても理解されえないが、しかしながら、それは行為によつて、材料によつてよりよく理解されるのである」¹⁵⁾と述べることによって、行為や材料に関わる *forma artificiale* を通じて、その他の *forma* が理解せうという関係を打ち出している。

forma naturale や *forma mathematica* は建築家の創案を規定する役割にあるが、その創案が正しい判断であるかは、*forma artificiale* を通じて、実際に建物を建設した後にしか明らかにされえないということであろう。このような *forma artificiale* の役割は、建築における経験的領域の固有性を示すと同時に、知の限界および知と経験の依存関係を明らかにするものであり、*peritia dell'arte* の性格を見出す際の重要な手掛かりになるであろう。

4. *peritia dell'arte* と *scienza* の関係

前節の考察によつて、建築家の知の限界と知と経験の依存関係が見えてきたが、建築を *scienza* の芸術と考えるスカモッツィにとつて、この知の在り方は、*scienza* の優位性を確保する際の妨げになると考えられる。しかしながらスカモッツィは、*peritia dell'arte* と *scienza* の関係を、職人と建築家の関係にまで拡大し、これまで

とは異なる観点において、*scienza* の優位を証明している。

スカモッツィは建築家の職域を規定するために、ウィトルウィウスの「建築家を公言している人々が真実技術によってでなく、まちがって建築家と呼ばれている」という一節を引用し¹²⁾、同時代の人々の様子を紹介しながら建築家の資質に関する見解を述べている。スカモッツィ曰く、「驚くべきことに、我々の時代には次のような人々が存在する。立派な知識人、学識の高い人物に相応しいほかの職業と同様に、高い尊敬を払われるべき *scienza* である建築に従事するにもかかわらず、必要不可欠であるはずの読み書きを知らず、その上、これらを研究、観察していない者である。こうした者たちの大部分は、卑怯で低級な精神を具えた儲けに執着する人々である」¹³⁾。この文章には、当時の人々の怠惰な様子が示されているが、スカモッツィにとって重要なことは、このような悪しき例に含まれないように、建築家と呼ばれる者が、それに相応しい能力を持たなければならないということである。このように建築家と他者とを区別する必要性を提示したスカモッツィは、建築家と呼ばれるに相応しい職能の内容を列挙している。スカモッツィ曰く、「それゆえ、その天賦の才と修めた *scienza* ゆえに、我々が建築家の仕事の多くを知性に帰するのは道理に適っている。建築家は、建物およびそれらの構成要素や装飾の全種類に対する理解と認識を持ち、各々の感覚に従って、それらの典型を創造することで、*invenzione* と *disegno* を行わなければならない。さらには、作品の建設のために、創られるべき *forma* を念入りに検討し、費用を都合よく計算し、そして材料を考慮する方法を知らなければならないし、その上、最後まで順序良く、すべてを良い方向に指揮し、導かせることのできる棟梁を選ぶ方法をも、身に付けなければならない」¹⁴⁾。この文章には、建築家が、建築に関する様々な事柄を、才能と学識によって獲得していなければならないこと、そして、建設の事柄に関しては、様々な実践的方法を熟知していなければならないことが述べられている。このスカモッツィの見解は、建築家には多様な職能が必要であることを示すものであるが、同時に、職人の手仕事以外、全て建築家の職域になるという境界をも明らかにするものである。

このように上記の文章からは、職域の境界が意識されながら、建築家の職能が規定されていたことを読み取れるが、しかしながら、職人と建築家の関係におよぶ思想は、ここでは明らかにされていない。我々に言わせれば、そもそも経験を知性で把握することはできないとするスカモッツィが、経験の特質を把握して、知との関係を規定することこそ、難しいのではないかと思われるが、ところがスカモッツィは、古典哲学を巧みに応用しながら、知と経験の複雑な関係性を明らかにすることを回避して、*peritia dell'arte* と *scienza* の特質を根拠として、職人と建築家との関係を規定するに至っているのである。

このことを見ていくにあたって、上の考察をふまえながら、前々稿で考察した *scienza* の二つの性格と *scienza* に依拠しない *arte* (*peritia dell'arte*) を参照し、建築家と職人の職域に関するスカモッツィの考え方を整理しておきたい。

●*scienza* の二つの性格すなわち理論的性格と実践的性格

scienza には理論的なものと実践的なものがある。理論的なものとは *arti liberali* の理論的側面である。実践的なものとは *arti liberali* の実践的側面すなわち建築の制作に直接関係

してくる数学に基づく各科目であり、*invenzione* を導く *forma mathematica* の基本となる。

●*scienza* に依拠しない *arte* (*peritia dell'arte*)

この *arte* は *arti meccaniche*, *arti imitatrici*, *arti operative* に分化される。*arti meccaniche* は器械や道具を製作するための技法、*arti imitatrici* は自然やその他の技を模倣するための技法、*arti operative* は職人の技巧的な手仕事を指す。¹⁵⁾

建築家の職域は *scienza* の領域内にある。上記のとおり、*scienza* の領域とは *arti liberali* の理論的側面と実践的側面である。建築家は、この *arti liberali* に基づいて、*invenzione* および *disegno* を実施する。一方、職人の職域は、*arte* (*peritia dell'arte*) の領域であり、三種の *arte* を実践する。

このように建築家と職人の職域は、建築家における *arti liberali* と職人における三種の *arte* という設定を基本として区別されるが、建築家と職人の関係は如何にして規定されているのであろうか。スカモッツィは、エレアからの客人と若きソクラテスを対話させ、政治家の知識とそうでない人の知識との相違を証明しようとした、プラトンの次の一節を引用している。「ところがじつは、さらに建築家というものもすべて、この当人自身は自分で手をくだして働く職人ではなくて、職人たちの支配者なのだ」¹⁶⁾。この一節は、政治家の国家運営の仕方を説くために、建築家の知の特殊性を利用したくだりであり、次のような結論を導いている。すなわち、計算を専門職とする計算家が判定のみを目的としているのに対し、建築家は判定を行い、なおかつ「職人たちのめいめに適切な指示を与えながら、指示された仕事が完成するのを見届ける必要がある」¹⁷⁾。したがって、建築家の知識と計算家の知識とは、ともに知ることだけを目的とする純粋な知識であるが、「その一方が判定のみをくだし他方が命令をくだすのだという点で、相互に異なっているのではないか」¹⁸⁾。このようにしてプラトンは、建築家を命令をくだす知識の所有者として、対する計算家を命令を受ける者として定義づけていた。この定義は、職業的人間のあるべき姿、相応しき、すなわちイデアの理想形を示すものであり、スカモッツィに最高の示唆を与えるものであったに違いない。スカモッツィはこのプラトンの教義を用いて、建築家と職人との間に境界線を引き、建築家を支配する者、職人を支配される者と定義し、アルベルティの言葉を借りて以下のように述べるのである。「手法については(アルベルティが述べたように、)建築家が頭の中で構想したものを、のちに行為に転じるときには、職人の手や道具は、建築家の道具になる…」¹⁹⁾。

このようにスカモッツィは、建築家と職人を主従関係として規定したが、さらにプラトンの言うように、建築家は「職人たちのめいめに適切な指示を与えながら、指示された仕事が完成するのを見届ける必要がある」。したがって、純粋な知を求める建築家は、職人を支配するために、*scienza* に依拠しない *arte* (*peritia dell'arte*) をも熟知していなければならないのである。そこでスカモッツィは、最終的には建築家が、「職人のみならず哲学者としても」²⁰⁾存在しなければならないという要求を提示し、*scienza* の領域とそれに依拠しない領域との獲得を、建築家に課したのである。先に引用された「それゆえ大いなる道理として我々は、建築家に多くの部分を負わせるのである…」という、建築家の職能に関する文章には、こうしたスカモッツィの理解が示されているのである。

以上のように、スカモッツィは、建築家と職人すなわち *scienza* と *peritia dell'arte* を主従関係として規定した。これは経験よりも知の方が優れているというスカモッツィの考えを保証するものである。そして、また同時に、「職人のみならず哲学者としても」という言葉が示すように、*peritia dell'arte* という固有の領域が、*scienza* によって包含されるという主従関係の図式をも、規定していたのである。この図式は、前節において示された、知と経験の依存関係を、知の優越を確保しながら規定するものであると、言うてよからう。

5. 諸芸術比較論を通して見た *peritia dell'arte* の性格

前節において職人と建築家すなわち *peritia dell'arte* と *scienza* の関係を見てきたが、この関係を職人と芸術家に置き換えるならば、これは建築に限られるものではなく、諸芸術にも関係するものである。イタリア・ルネサンスにおいて、この関係は諸芸術比較論争 (*paragone*) という事態を引き起こしたが、これと同様にスカモッツィは、建築と絵画・彫刻の関係を規定するという諸芸術比較論を構築していた。

諸芸術の比較に関しては、レオナルド・ダ・ヴィンチの「諸芸術比較論」が有名であるが、特に絵画と彫刻の比較に関する議論の中心には、制作に関する方法的相違が述べられた。実在するものを *scienza* を通じて表現する絵画と、*scienza* を用いなくとも表現できる彫刻という方法的相違によって、絵画は彫刻の上位に位置づけられると考えられていた。レオナルドは、このように自らの比較論を構築し、絵画と彫刻の優劣を規定するに至ったが、このように実在するものを改めて表現する行為を概念化するならば、これは模倣と呼べるであろう²¹⁾。

模倣は、イタリア・ルネサンス芸術においては、美に関わる問題を含んだ極めて重要な方法であった。これはスカモッツィにおいても同様であり、スカモッツィは建築家に固有の模倣の方法、すなわち自然（人体）を建物に反映させるための方法を、*scienza* に基づく思索的な場、すなわち *invenzione* に関連づけて論じており、そしてその中で、諸芸術の優劣を規定している。

前稿で考察されたスカモッツィの模倣論を振り返ると、*forma naturale*（自然の形態）は、そのうちに「小さな宇宙」を住まわせていることから、人間の知性を駆使しても容易には把握しきれないため、直ちに建物に適用することができないと考えられていた。したがって、*forma naturale* から普遍的な数値を抽出し、これを基に *forma mathematica*（数学的形態）を作成し、作図を行わなければならないと考えられていた。このような *forma naturale* から *forma mathematica* への方法的移行が、建築家に固有の模倣と見做されていた²²⁾。一方、模倣の方法として、*arti imitatrici* という用語が使用され、これに絵画・彫刻が位置づけられていた。この *arti imitatrici* は、自然や *arte* (*peritia dell'arte*) の模倣を意味し、*arte* (*peritia dell'arte*) 中のひとつとしての、*scienza* に依拠しないものとして規定されていた。つまり、建築家の模倣は *scienza* であり、画家・彫刻家の模倣は *arte* (*peritia dell'arte*) であると考えられていた²³⁾。

このようにスカモッツィの模倣論を振り返ってみると、諸芸術における模倣の方法的相違が *peritia dell'arte* と *scienza* の関係に基づいて規定されていること、そして諸芸術の優劣も、これと同じ関係に基づいて規定されていることがわかる。これは、自らの芸術が

scienza に関連し、他の芸術が *scienza* に関連しないゆえに自らの芸術が上位であるとする、レオナルドの優劣規定とほぼ同様であり、言うなれば、イタリア・ルネサンスにおける諸芸術比較の方法論に準拠したものと言えるであろう。

この諸芸術優劣規定を通して、スカモッツィの建築理論における *peritia dell'arte* という概念の役割が明らかになる。つまり、*scienza* としての上位の建築、*peritia dell'arte* としての下位の絵画・彫刻という優劣を導くことによって、前節で述べられた *scienza* と *peritia dell'arte* の主従関係が強調されているが、これは *scienza* と建築との相関をゆるぎないものにする効果があり、このことから *peritia dell'arte* は、スカモッツィの建築理論に学的性格を付与する性格を備えた概念として存在していたと考えられるのである。

6. まとめ

以上、*peritia dell'arte* を考察の対象として、その内容、それから派生する *peritia dell'arte* と *scienza* の関係性すなわち建築家と職人の関係性および諸芸術比較論の内容を通して、*peritia dell'arte* の性格を明らかにしてきた。

peritia dell'arte は、職人の技の熟練を意味し、経験の領域を示す概念であった。*peritia dell'arte* は、スカモッツィの論考においては常に、*scienza* に相対するものとして論じられていたが、これには、経験と知の関係性という根本的な問いが内在されていたと考えることができる。

建築制作に不可欠な要素として、スカモッツィは、*forma naturale*、*forma mathematica*、そして *forma artificiale* という三種の *forma* が存在すると考えていた。この考えは、*forma artificiale* が職人の経験的製作領域、*forma naturale* と *forma mathematica* が建築家の学的製作領域にあるという設定に導かれ、さらに *forma naturale* と *forma mathematica* の判断が、*forma artificiale* を通じて証明されるという関係に深化するものであった。この *forma* の設定は、建築制作における知の限界ならびに経験と知の依存関係を明らかにするものであった。

建築制作における経験の優れた働きは、見方を変えれば、知の普遍性を貶めるものであり、延いては建築家よりも職人の方が優れていることを認めるものになるであろう。しかしながらスカモッツィは、建築家を上位とし、職人を下位とする考えを、知の優越を保証する古典哲学の教義を用いて、建築家は支配する者、職人は支配される者として、証明したのである。これは、上位の *scienza*、下位の *peritia dell'arte* という関係を確立するための重要な証明であり、そして、さらには上位の建築、下位の絵画・彫刻という関係を導くものであった。

以上の経験と知の関係性に基づいた論理は、建築制作における *peritia dell'arte* という経験的領域と *scienza* という知的領域との関係性を、後者の優越という形で結論づけるものであった。このような下位としての *peritia dell'arte* は、建築制作においては二次的存在であるが、いまやスカモッツィの建築思想の代名詞になっている「建築は *scienza* である」²⁴⁾という思想の証明にとっては、*scienza* とならび極めて意義のある概念であったと考えられるのである。

【 註 】

- 1) 下川勇・白井秀和：ヴィンチェンツォ・スカモッツィの建築理論における“scienza”について—アルベルティ、レオナルド・ダ・ヴィンチの“scienza”概念との比較を通して—、日本建築学会計画系論文集，第 572 号，193-200，2003 年 10 月（以下「論文“scienza”」と表記）；下川勇・白井秀和：ヴィンチェンツォ・スカモッツィの建築理論における“invenzione”と“disegno”について、日本建築学会計画系論文集，第 593 号，2005 年 7 月（以下「論文“invenzione/disegno”」と表記）
- 2) 前掲論文“scienza”を参照。
- 3) 前掲論文“invenzione/disegno”を参照。
- 4) “L'ARCHITETTURA si può considerare in due modi ; cioè quanto all'eccellenza, e purità della Scienza, e quanto al fine, e compimento dell'opera : in quella guisa à punto (come disse il Savio,) che si fanno tutte le Scienze, e tutte l'arti liberali ; cioè, per la Theorica, e per la pratica. Perché, si come il Filosofo considera i corpi nella loro natura, semplicemente, per via delle cause, & in astratto, e senza alcuna materia congiunta ad' essi ; così il Fisico pratico li considera organizzati, e con le loro parti, e membra, e come sanabili ; e perciò non è scientifico. Laonde, mentre l' Architetto specula nella sua Idea, e nel suo intelletto, e discorre le cause di tutte le forme, e parti di qualunque edificio, e le cause materiali, & efficienti, & i fini loro, (che sono primi nell' intentione) allhora egli è, puro scientifico. Mà quando poi tai edifici si considerano, e quanto a' loro siti, & alle materie, e quanto alla costruzione, & artefici de' maestri ; e come corpi artificati, & abitabili, (che sono i fini, per i quali essi sono fatti) allhora, perché cotai cose soggiacciono al senso ; perciò il giudicio dee esser della peritia dell' Arte, e non s' aspetta all' intelletto, & alla purità della scienza ; onde Platone disse. *Hoc, vt arbitror, ad iudicem pertinet, non ad finem verire*” Vincenzo Scamozzi : L'Idea dell'Architettura Universale, Centro Internazionale di studi di Architettura Andrea Palladio, 1997 (Venezia, 1615), Parte Prima, Libro Primo, Capo I, p. 7.
この文章は、ウィトルウィウスの「建築家の知識は多くの学問と種々の教養によって具備され、この知識の判断によって他の技術によって完成された作品もすべて吟味される。それは制作と理論から成立つ」という見解を基に述べられたものである。ウィトルウィウスの引用は、森田慶一訳注、『ウィトルウィウス建築書』、東海大学出版会、昭和 44 年、第 1 書・第 1 章・1, p. 5 を参照。
また、原文に記載されているプラトンの言葉（斜字部分）は、文法的に辻褄が合わない部分があり、したがって、邦訳は記載していない。また、スカモッツィが、どのラテン語版を参照したのか不明であるため、引用箇所を限定することはできない。
- 5) 前掲論文“scienza”では「3. scienza について」において、前掲論文“invenzione/disegno”では「3. disegno について」ならびに「4. イタリア・ルネサンス芸術論との比較—ヴァザーリの disegno 論を中心として」において、経験と知の関係性に関連する事柄が考察されている。
- 6) 前掲論文“invenzione/disegno”所収「3-1. disegno の二つの意味」を参照。
- 7) “dalla esperienza si fa la pratica, e dalla pratica la peritia, e poi dalla peritia l'Arte” Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Libro Primo, Capo XXIV, p. 71.
- 8) scienza に属する arti liberali と scienza に属さない arte の関係については、前掲論文“scienza”所収「3-4. scienza と arte の関係」を参照された。
- 9) 前掲論文“invenzione/disegno”所収「2-3. invenzione の補助—forma naturale と forma mathematica について—」を参照。
- 10) “LE FORME artificiali secondo noi possono essere in tre modi ; cioè in potenza dell'artefice, e nella superficie della material (essendoche non si concede alcuna forma nell' interno de' corpi,) la terza nell' atto stesso, e visibili al senso” Ibid., Parte Prima, Libro Primo, Capo XII, p. 42.
- 11) “e quindi è che le forme naturali non possono esser comprese così bene dall' intelletto nostro, come le forme Mathematiche, e quelle dell' Architetto : nè parimente dal senso, come le sodette [sopradette] ; mà [ma] si comprendono molto meglio dall' atto : per mezzo della material.” Ibid.
- 12) スカモッツィがウィトルウィウスを引用した箇所は、註 13) の斜字である。

これは、ウィトルウィウスの原文と一致しており、したがって邦訳は、森田前掲訳注書、第六書・序章・7, p. 269 に準拠した。

- 13) “ONDE ci maravigliamo non poco, che all' età nostra sono molti : che si dāno [danno] à [a] questa così onorevole [onorevole] scienza, come ad altre nobili professioni degne di belli intelletti, e persone di studio ; senza saper ben leggere, e scrivere, non che haver [aver] studiato, & osservato quelle cose, che le sono grandemente necessarie : e questo avviene, perché la maggior parte d' essi sono genti vili, e d' animo basso, e dati al guadagno ; e però dice Vitruvio. *Ideo quod qui profitentur non arte vera, sed falso nominantur Architecti [libro 6, proem.]*” Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Libro Primo, Capo XXIII, p. 68.
- 14) “E PERCIÒ à [a] gran ragione noi habbiamo attribuite all' Architetto tante parti ; così per le doti dell' animo, e per le scientie acquistate ; come la intelligenza, e cognitione di tutti i generi di edifici, e delle loro parti, & ornamenti, e saper far l' inventioni, e disegni, & ordinar' i loro modelli : per dimostrarli chiari al senso d' ogni uno ; mà [ma] inoltre dee sapere esaminar diligentemente le forme, che si hanno à [a] fare, e calcolar molto bene le spese, e considerar le materie, per la costruzione dell' opera ; poi saper eleggere i capi mastri a' quali hà [ha] da comandare, e far' incaminare il tutto bene, e con buoni ordini sino al fine...” Ibid.
この文章の内容は、ウィトルウィウスの「建築家の知識は多くの学問と種々の教養によって具備され、この知識の判断によって他の技術によって完成された作品もすべて吟味される。それは制作と理論から成り立つ。」（森田前掲訳注書、第一書・第 1 章・1, p. 5）や、「それ故、みずから建築家を公言するものは両方伴 [技術的知識と理論的知識] に精通していなければならぬと思われる。こうして、建築家はまた天賦の才能に恵まれていなければならないし、学習にも従順でいなければならぬ。」（同訳注書、第一書・第 1 章・3, p. 7）という見解に基づいて記されたものと考えられる。
- 15) 前掲論文“scienza”所収「3-3. scienza の二つの性格すなわち理論的側面と実践的側面」および「3-4. scienza と arte の関係」を参照。
- 16) Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Libro Primo, Capo XXIV, p. 70；邦訳は木野有庸訳、『ポリティコス』（プラトン全集 3）、岩波書店、1976, p. 199 [259e] を参照。
- 17) 同邦訳書, p. 199 [259e] を参照。
- 18) 同邦訳書, p. 200 [260] を参照。
- 19) “Di maniera (come disse l' Alberti,) che volendo poi ridurre in atto, ciò che nell' Idea, s' ha l' Architetto formato, le mani, & i stromenti degli artefici divengono stromenti dell' Architetto...” Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Libro Primo, Capo I, p. 6. スカモッツィがアルベルティを参照した箇所は次のとおりである。「一体誰を建築家と見なそうとするのか、説明すべきであろう。もちろん私は大工を思い浮かべはしない。建築家を君は他の最高の教養の力と対比しているものであり、事実、職人の手は建築家にとって道具でしかない。」相川浩訳、『アルベルティ建築論』、中央公論美術出版、昭和 57 年, p. 5 を参照。
- 20) Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Libro Primo, Capo VIII, p. 24.
- 21) スカモッツィとレオナルドの模倣観は、前掲論文“scienza”所収「4. イタリア・ルネサンス諸芸術論との比較—arte(technè)を通して」において比較考察されている。
- 22) 前掲論文“invenzione/disegno”所収「2-3. invenzione の補助—forma naturale と forma mathematica について—」「3-1. disegno の二つの意味」を参照。
- 23) 前掲論文“scienza”所収「4-2. arti imitatrici」を参照。
- 24) 2003 年 9 月 7 日から翌年 1 月 11 日にかけて、パッラーディオセンター主催のスカモッツィ展が開催されたが、この展覧会の題目は、“architettura è scienza (建築は学である)”であった。このことから判るように、スカモッツィの建築思想は、建築を学的芸術として規定することを主体としており、したがって、その著『普遍的建築のアイデア』において、peritia dell'arte と scienza の関係規定に基づく理論が支配的であったことは明らかである。レオナルドに通じるこのスカモッツィの特異な思想は、この点を理解することによって明確になるであろう。

(2005 年 7 月 1 日原稿受理, 2005 年 12 月 7 日採用決定)